家庭数配布

春日部市立桜川小学校

学校だより

3月号　　令和３年２月２６日発行

春日部市大衾４９６－１　℡７４６－６２３８　児童数６４９名（2/26 現在）
桜川小HP　https://schit.net/kasukabe/essakuragawa/

学 校 教 育 目 標

○進んで学ぶ子（かしこく）
○思いやりのある子（やさしく）
○体をきたえよく働く子(たくましく)

地域と共に　はぐくむ
やさしさと笑顔あふれる
活力ある学校

地域のみなさんが先生です！～いきいきと学ぶ桜っ子～
実際の様子を見たり、触れたりと真剣に学びました。ご指導ありがとうございました。

郷土資料館による授業（3 年）　盲導犬についての授業（４年）　リモート授業（なかよし学級）

３．１１　あの日から１０年

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から丸十年が経ちます。この十年で復興は進みましたが、「海上保安部の潜水士が行方不明者の捜索を行った」というニュースがテレビで未だに流れているという現状もあります。現在も 2500 人以上の行方不明者がいるとのことです。そのご家族からすれば、10 年前の震災の日から時が止まったままなのかもしれません。

震災の日、この桜川小ではどんなことが起きていたのか。この経験を無駄にしてはいけないと、当時の校長が職員とともにまとめた記録があります。当時、本校で学級担任をしていた教諭の記録の一部を紹介します。

５時間目が間もなく終わる頃でした。校庭で体育のサッカーをしていました。今にも雨が降り出しそうな、そして今まで見たことの無いような本当に気持ちの悪い黒い雲が空一面に広がっていたので、少し早めに授業を終わらせました。･･･教室に戻る子、道具の片付けをする子に分かれて行動をしていたその時でした。「(大音量で）緊急地震速報です。大きな揺れに注意してください･･･（繰り返し)」　この頃、この音が緊急地震速報の音だと知っている子はいなかったし、私も知りませんでした。私は体育小屋の側にいて、子供たちが持ってくる道具を片付けている最中でした。この音を聞いても最初は「何か防災無線で言っているな。いつも流れてくる音とは違うな。」くらいの認識しか無かったのです。でも、この音が繰り返されたので「何か緊急性のあるものだろうか。地震が来ると言っているけれど、市を挙げての避難訓練だろうか？」と思いながら辺りを見回しました。子供たちも聞き慣れない防災無線にぽかんとしたまま立っています。･･･職員室の方を見ると、何となく慌てている様子と、白旗(避難時の目印)がちらちらと動いている様子が見えました。それではっきりとわかりました。「まずい、これは練習ではなく、本物の地震が来る。あの放送は本物なんだ！」私はすぐに、体育小屋が崩れても大丈夫な辺りまで移動しました。移動しながら「みんな！地震が来るから先生の方に集まるよ！」と、できるだけ不安感をあおらないように、大きな声で、だけど優しい声を出そうと気を付けながら指示を出しました。…体育小屋周辺にいた子供たちは、私が移動するのについてきていたので、すぐに集まることができました。そしてすぐその場にしゃがませました。しかし、サッカーゴール周辺でボールを集めていた数人の子供たちは依然ぽかんとして立ち尽くしたままでした。事態は一刻を争う、そう思ったので「いいから、早く俺の所に集まれ！走ってこい！」と力の限り怒鳴りました。それを聞いてやっと気付いたのか、駆け足で私の方に向かってきました。と同時に揺れが始まりました。まだ大きな揺れではなかったので、何とか校庭に居た子供たちを全員私の近くに集め、しゃがませることができました。揺れはどんどん大きくなりました。「ゴゴゴゴゴ･･･」という音も聞こえたと思います。経験したことの無い大きな揺れだったので、恐怖で女の子たちが泣きはじめました。「お母さんが死んじゃうよ」と大きな声で叫ぶ子を友達が抱きしめ、頭を撫でていました。私は「大丈夫、周りの家を見てごらん。一つも崩れていないだろう。君の家だって、お母さんだって大丈夫だよ。」と何度も励ましていたのを覚えています。一方、男の子たちは、恐怖で声が出なかったのか、それともこの場は声を出してはいけないと判断したのか、とにかくだまって座っていました。幸いだったのは、校庭のど真ん中に避難できていたので、落下物などの恐れがないということでした。それでも、あまりに大きな揺れが「まだ終わらないのか」と思うほど長く続いたので、地割れが起きた場合、子供たちをどこに避難させればいいのだろうかと考えましたが、よい案は浮かびませんでした。･･･やっと揺れがおさまると、Ｃ棟教室の方が動き出しました。職員室の方からは白旗を持った先生がやってきて、避難隊形の中心地を作り始めました。･･･引き渡しが始まりました。連絡がうまく回らなくとも保護者の方々は集まってくれていました。･･･そうこうしている内に、あの不気味な黒い雲から雨が降り出しました。クラスの半分くらいがお迎えに来てもらっていました。校長の指示のもと、校庭の木陰で保護者を待ちました。3 月とはいえ寒空で子供たちは寒さに耐えながらお迎えを待ちました。さすがに本降りになると体育館に避難することになりました。この頃になると私のクラスは７～８人が残るだけになりました。体育館は確かに雨を防いでくれましたが、余震の揺れを校庭にいた時よりも感じました。床の揺れも怖かったですが、天井の揺れ、バスケゴールの揺れで起こる金属がぶつかる音は恐怖心をあおり、子供たちも「こわい、こわい」と口々に言っていました。震えている子もいました。天井の、何もないところに移動しては、「大丈夫、先生たちがいるからいつだって避難できる。」と安心させました。･･･最終的に残った数人を家まで送り届け、それでも家に誰もいない場合は、学校で保護することになりました。学校から出ると、町は恐ろしく静かだったことを覚えています。･･･学校に戻ると、学校で保護するのは４～５人となり、主に男性職員が学校に残り最後まで見届けることになりました。･･･その後も余震は続き、そのたびに防災無線から緊急地震速報が鳴り響き、残った子供たちを校庭に避難させることが何度も行われました。気を紛らわせるために、子供たちは自分から進んで宿題をしていました。最後のお迎えが来た頃、夜中の１２時を回っていたと思います。それを見届けた後、私は帰宅しました。こうして私の３月１１日は終わりました。

この記録の作成を呼びかけた当時の校長は、まとめた冊子の中で「どうぞ、この手記を頭の片隅に置いてください。そして、これからも災害から子供たちを守ってやってください。」と述べています。この意志をしっかり受け止め、そして次につないでいきます。(校長　加藤)

家庭数配布